

礼拝黙想 MEDITATING ON WORSHIP

A 『受洗した友への手紙』

バプテスマおめでとうございます。キリストを信じ、洗礼を受けるということは、人間の一生のさまざまなふし目、たとえば入学とか、就職とか、結婚といった人生のふし目の中で最大のものです。なぜならそれは「永遠」につらなるふし目だからです。

さて、あなたとわたし、これから地上の旅路をつづける間、おたがいの信仰によって慰められ、励ましあいつつ歩みをつづけたいものです。そこで信仰生活のスタートをあなたより少し早く切った者として、口はばつたいながら、いくつか気づいた「信仰生活をつづけるコツ」とでもいったものをして参考にしていただければと思います。

あなたは洗礼を受けられましたが、〇〇教会の信者になったのではありません。キリスト信者になったのです。そしてこれから後の生涯、キリスト信者としての最大の仕事は、このキリスト信仰を持ちつづけること、守り通すことです。内村鑑三という偉い先生がこんなことを書いています。

わが事業は信者を作る事ではない。また聖書を講ずることでもない。また靈魂を救うことでもない。わが事業はイエス・キリストを信ずることである。彼にありてわが事業はすでにすんだのである。われが安らかに人生を楽しむうはこれがためである。われが事業にあせらないのもまたこれがためである。事業、事業とあせる米國流のキリスト教は、余(よ)の全然堪えないところである。(全集 21 巻二一八頁。大正4年)

あなたが今与えられたキリスト信仰を大事にし、守り育てること、これが第一の仕事なのです。そのためにはいくつかの配慮が必要です。ちょうど植物の成長に太陽と、水と、土と、肥料が大切なように、信仰

の成長にも上なる主イエスの愛と、聖霊の働き(この聖霊はあなたが「イエスは主なり」と告白して受洗された時すでに与えられています)と共に、信仰の根が深く伸びるように、信仰の根まわりの土を耕すこと、肥料を与えることも大事です。まず、第一は聖書を毎日読みつづけることです。一番よいのは毎日「旧約聖書」と「新約聖書」を一章ずつ読むことです。意味が分っても分らなくても読んでゆくのです。木村清松という大伝道者がこう言いました。「聖書を読んで分らぬところがあつたら、飛ばして読め。分らないむずかしいところは骨みたいのところだから、それは神学者という犬が喜んでしゃぶる。君たちはよく分る肉のようところを読み進め。そのうち骨の味も分ってくる」。

もちろん、聖書を読む分量や時間は自分で決めることですが、毎日読む、読まぬと落ちつかない、という習慣をつけること、これが土を耕すことです。

第二は祈りです。祈りは神との対話ですから自分の思いのたけを言えばよいのです。はじめに「天のお父様」とか、「父なる神様」とか、「主イエス様」とか、主に對する呼びかけがあり、最後に「この祈りを主イエス様の御名によりお捧げします」と結べば立派なキリスト信者の祈りになります。

よびかけと結びの間に何を申し上げてもよいのです。お願いがあり、感謝があり、おわびがありますが、私としては祈りが「どうぞ」の祈りに終始するのは淋しい気がします。「どうぞ病気をいやして下さい、どうぞ××を与えて下さい」という祈りも必要ですが、「なんと」の祈りも大事だと思います。「なんと主イエス様はすばらしい方でしょう」という讚美の祈り、これは受洗間もないあなたにもできるのです。例えば「今日も私のような者にこんな健康を与え

て下さるあなたは、なんとすばらしい方でしょう」と祈るのです。この祈りを毎日、朝起きた時とか、寝る前とか、食前とか、祈らないと忘れ物をしたような気になるまで習慣づけるのです。それも声を出して祈るくせをつけるのです。信仰的土壤がさらに碎かれることうけ合いです。

第三は聖書を学ぶ集会にできるだけ出ることです。これは信仰の根を養う肥料です。洗礼を受け、長年礼拝に出ている信仰があまり成長しない人がいます。根を養っていないからです。聖書はたしかに骨のような、神学者でない分らぬところもありますから、聖書研究会や、聖書講習会で系統的に学ぶことが大切です。また聖書だけでなく、キリスト教講演会や、これはいいと思う催しに参加出席するのです。私に病弱の叔母がいましたが、キリスト信仰が深く入った人だなと感じられました。それは病弱ゆえに主イエス様によりかかる度合いが強かったともいえますが、病弱のため婚期が遅れ、それだけ集会に出る回数が断然多かった、そして心から耳を傾けて聴いた、これが信仰を養ったと思います。

第四は、よい信仰の友を持つことです。信仰の喜びや悩みを語り合える友を与えて下さいと祈るのです。この祈りは聴かれます。右にのべた聖書研究会や講習会に足しげく通っていると必ずすばらしい信仰の友にめぐり合えるものです。キリスト信仰は一人ひとり独立ですが孤立ではありません。キリスト信者の交わりほど深いものはないのです。私もかつて受洗まもないころ「よき信仰の師と友を与えたまえ」と切に祈りましたが、なんと主イエス様はすばらしい師と友を与えて下さったことでしょう。

さて最後はあふれです。それが五番目です。聖書を勉強する(熱心な人はヘブル

語やギリシャ語で聖書原文に肉迫する勉強も始めます)、よい聖書の話や説教や講演を聴く。すべてもらうことです。自分に取
りこむこと、自分を豊かにすることです。し
かしいくら知識として教養として自分がキ
リスト教的に豊かになったとしても、あふ
れること、吐き出すことがなければ、流れ
こむ川はあっても流れ出す川がなかった
死海の水が死んだように、キリスト信仰も
見せかけの豊かさの中に枯れるおそれ
があります。

それでは「あふれ」とは何でしょう。聖書
を学び、主イエスのみこころ、その愛を深
く教えられたところから立ち上り、一人ひと
りが自分のできる応分の働きをするので
す(エペソ4:16)。自分に与えられた能力に
応じ主のために働くのです。しかしその応
分の力がもし8から10までの間とすると、
上限に近い応分がよいと思うのです。教
会学校の先生になるのもよし、会堂の掃
除をするのもよし、教会活動や社会活動のさ
まざまな仕事のお手伝いをするのもよし、何
か自分から捧げる、吐き出す、あふれさ
せる、これが信仰生活の成長に必要で
す。

その中から献金ということができます。
献金はガスの集金のように「払う」もの
ではありません。会費のようによい話を聞か
してもらって代償に「出す」ものでもありませ
ん。それは捧げるもの、あふれるもので
す。受洗された始めから、自分は一か月こ
れこれ捧げようと心に決め、それを毎月
献げる習慣をつけるのです。

そして「あふれ」「捧げ」の最高が礼拝で
す。日曜日礼拝にゆくのは良い説教や聖
書講義を聴いて自分を豊かにするため
ではありません。主を主とし、神を神として
礼拝するためです。むこう様を讃めたたえ、
主がいかに大なることをされたかを讃
嘆、感謝するためです。この日曜礼拝を休
まぬ習慣をつけて下さい。やむなく出られ
ぬ時は家庭で礼拝する時を工夫するの
です。そうです。この家庭での家族との集

を始めることが、あなたの信仰を持ちつづ
ける大きな力となるでしょう。

もっとも書きたいのですが紙数がつ
きました。ゆったりと、しっかりと信仰生活
をつづけましょや。

主にありて。小弟。

『ことこと信者とかたかた信者』

キリスト信者にふた種類ある。「ことこと
信者」と「かたかた信者」だ。新約聖書のマ
タイ福音書をひらくと、その第19章に、一
人の富める青年がイエスに近づいて質問
する場面がある。その時青年はこう言った。

先生、永遠の生命を得るためには、どん
なよいことをしたらいいでしょうか。

これに対するイエスの答えはこうだ。

なぜよいことについて、わたしにたずね
るのか よいかたはただひとりだけである。

青年は「よいこと」をたずねたのに、イエ
スは「よいかた」を問題にされる。「よいこ
と」はひきょう地上のこと。これにひきか
え「よいかた」は天上のお方だ。

明治の中ごろ、東京に星野天知という砂
糖の大問屋の富める青年がいた。真影流
の剣術の達人で、しかも柔術は柳生流免
許皆伝だ。その上頭がめっぽうよくて小学
生の時から主席で通し東京大学の農科大
学に学んだ。それは千葉県に二百町歩の
開墾地をもっていたためである。それに加
えて文芸の才があり、雑誌「文学界」を創
刊してみずかち主宰し、その財政的スポン
サーとなり、藤村や透谷や一葉らにそ
の活躍の場を提供する。しかも品行方正
で、のち書家になるほど書にすぐれた美
青年であった。

この天知が教会の門をたたき、受読する
が、牧師と衝突して教会を脱退し、ブランド
さんという英人宣教師にめぐり合うがやが
て信仰からも離れてゆく。なぜか。彼は少
年の日から「偉い人」にあこがれたという。
そして武術でからだを鍛え、学時を修め、

精神修養するため実践的宗教としてキリ
スト教を求めたのだ。彼が教会に求めた
のは、立派な人になること、しっかりと
すること、偉くなることであつた。つまり
自分を豊かにすることであつた。

この「ことこと信者」は結局自分が中心な
のだ。そして、主から恵みをいただいたこ
と、病気がいやされたこと、よい結婚が、
就職が、入学ができたこと、「ことこと」が
強調される。

イエスが問題にされた「よいかた」は父
なる神である。今日の私たちにとっては主
イエス・キリスト御自身である。自分が主
を信じた結果、自分が恵まれたこともあり
がたいが、その恵みの本源なるかたに感
謝し、ほまれを帰したてまつるのが「かた
かた信者」である。

黒崎幸吉という高名な聖書学者に、回心
をもたらしたのは、その師内村鑑三ではな
く、キリスト同信会の堀米吉という一実業
家であつた。青年黒崎がキリスト信者とし
てはずかしくないことに腐心していた時、
堀米吉は自分のことよりも、主がいかに
かたじけなくおかたであるかを思い、感
激し、その主を礼拝賛美することがその喜
びであつた。黒崎幸吉の回心は、まさに
「ことこと信仰」から「かたかた信者」への
開眼であつたといえる。さきの天知はつい
に「ことことどまり」に終って信仰から去
つた。

だれしも最初、教会の門をたたくのは、
自分のくるしいこと、だめなことに耐えられ
ずたたくのだ。しかし、「ことことどまり」に
なつては天知の轍をふむことになる。堀米
吉のように、黒崎幸吉のように「かたかた
信者」になったとき、人はかわらぬ主の御
手の中にいる。大事なことは、私たちがど
んことをしたか、またしているか、これから
するか、ではない。どんなかたを信じ、そ
のかたに愛されているかである。

(藤尾正人著『ほつとしなけりや福音じゃない』より) Ω

<お知らせ Announcement>

◆ BSはキャンセル日 7/27(金)夜 ◇ 7月午前礼拝 7/29(日) 午前10:30~

「教会〔マラナサ・グレイス・フェローシップ(略称:MGF)はキリストのからだであり、いっさいのものを
いっさいのものによって満たす方の満ちておられるところです」(エペソ1:23)。「そしてあなたがた〔MGF〕は、
キリストにあって、満ち満ちているのです。キリストはすべての支配と権威のかしらです」(コロサイ2:10)。